

＝ コメディカル・レポート ＝

# 当院における10代クラミジア感染者の検討

佐藤 あゆみ, 岸根 初恵, 大川 美恵子

## はじめに

産婦人科の外来患者について、クラミジア感染症を疑って抗原検査をすると、20歳未満が最も高い感染率を示すことはよく知られている。我々も第14回思春期学会で、15歳から19歳の感染率は16.3%と他の年代に比べて最も高いことを報告したり。そこで今回は、10代の感染者だけについて臨床的に検討した。

## 対象および検査方法

調査対象は、平成5年1月から平成10年3月までに当科を受診し、クラミジア抗原検査で陽性であった10代患者43名である。検査方法は、平成6年4月まではクラミジアザイム法、その後はイディア法である。

## 結 果

### 1. 年度別10代クラミジア感染者数 (図1)

10代感染者は平成7年以降の増加が目立ち、平成5年、6年に比べ平成7年以降は倍増した。

### 2. 年齢別10代クラミジア感染者数 (図2)

クラミジア感染者43名について、年齢別にみる

と、19歳17名、次いで18歳13名であり、この2者で全体の69.7%を占め最も多かった。また15歳から18歳のうち高校生は53.8%とほぼ半数を占めた。

### 3. 10代クラミジア感染者の就業状況 (図3)

就業状況について、本人記載による問診票より分類すると、高校生32.5%、学生9.3%と学業上の者は41.8%だった。

一方定職と思われる会社員は18.6%と少なく、サービス業4.7%、フリーター9.3%、無職14.0%と、社会的・経済的基盤が低いと思われる者が目立った。

### 4. 10代クラミジア感染者の初交年齢と発症までの期間 (図4)

初交年齢が不明な者を除き検討した。初交年齢は、13歳から17歳であり、性的に早熟な者が多く、発症までの期間は個々のケースで異なり平均

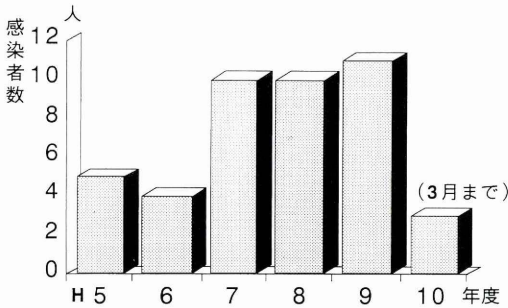


図1. 年度別10代クラミジア感染者数

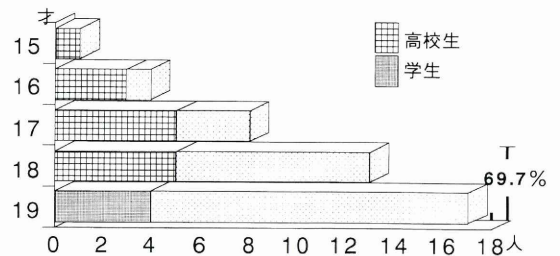


図2. 年齢別10代クラミジア感染者数

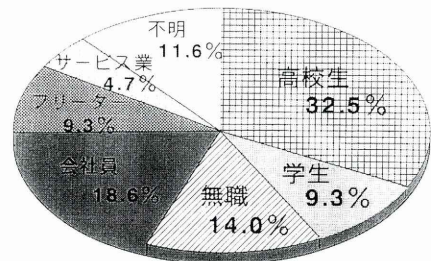


図3. 10代クラミジア感染者の就業状況

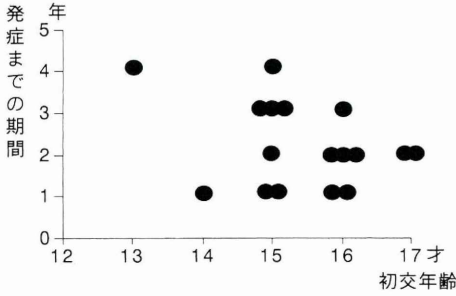


図4. 10代感染者の初交年齢と発症までの期間

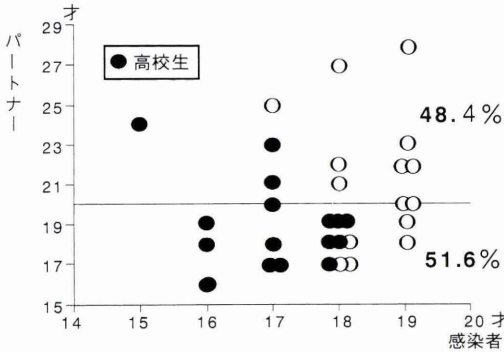


図5. 10代感染者とパートナーの年齢

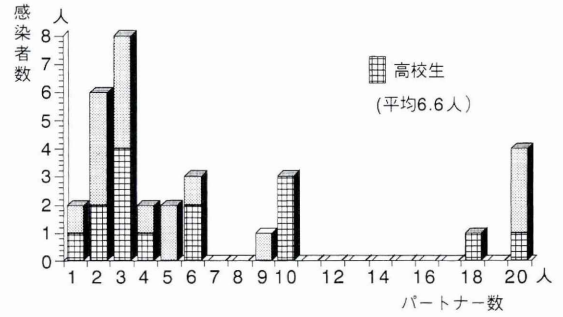


図6. パートナー数別の10代クラミジア感染者数

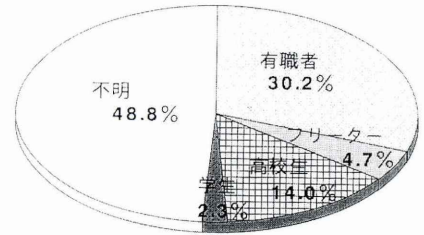


図7. 10代感染者のパートナーの就業状況

のため不明が多く、それを除くと有職者30.2%、フリーター4.7%、高校生14.0%、学生2.3%であった。

### 考 察

思春期とは自己を確立し、自分の行動や態度を選択し決定する基礎的能力を養う時期である。また身体的、性成熟の面からみると、性機能が発達、完成するまでの不安定な時期でもある<sup>2)</sup>。一方、現代は情報が高度化し、性の商品化が深刻なまでに進んだ社会である。1993年青少年の性行動に関する調査<sup>3)</sup>からも性行動の「低年齢化の兆し」が指摘され、とくに高校生女子の性交経験率(15.7%)は著しく上昇している。こうした思春期をめぐる性行動の変化は妊娠、性感染症などの様々な問題を提起してきた。

産婦人科の外来を受診する者のうち、クラミジア感染者は10代が最も高率に診断されることはすでに報告した<sup>1)</sup>。今回の結果からクラミジア感染者の特徴をみると、その初交年齢は平均15.4歳と早く、性的に早熟な者であり、また感染に至るまでのパートナー数は、平均6.6人と極めて多く、

2.18年であった。初交年齢と発症までの期間には相関関係はなかった。

5. 10代クラミジア感染者の年齢とパートナーの年齢 (図5)

感染時のパートナーの年齢は、16歳から28歳と幅があり、うち10代の者は51.6%、20代の者は48.4%であり、ほぼ同数ずつであった。高校生の感染者についてみると、パートナーは10代の者が多く、16名中12名、75%であった。

6. パートナー数別感染者数 (図6)

感染にいたるまでのパートナー数は1人から20人までとバラツキがあり、平均6.6人と多く、高校生においても同様であった。1人の者は2名のみで、ほとんどの者が複数であり、かつ18、20人の者もあり、安易な性交をくり返すことで蔓延するクラミジアに感染する機会を多くしてしまっているという実態を浮き彫りにした。

7. 感染者のパートナーの就業状況 (図7)

パートナーの就業状況は、本人の記載によるも

継続した人間関係を作れないままに、出会いと別れを繰り返すうちに感染したと思われるケースであった。また感染者のうち、高校生、学生の占める割合は41.8%に止まった。平成8年の教育白書によると<sup>4)</sup>、大学、専修学校などに就学する者の割合は67.0%であり、感染者は社会一般の平均と比べ学業途上の者は少ないことが分かった。また就業している者であっても定職と思われる会社員との割合は少なく経済的基盤の低い者が多かった。

こうした特徴、背景ををもちた若者が10代性感染症のハイリスク群である。今日、性の社会通念が崩れ、性の自由化が進行しつつある社会にあって、こうしたハイリスク群が氾濫する性情報に最も影響され易いのであり、その結果として性感染症を引き受けてしまうのである。避妊の知識、STDへの防御等の「狭義の性教育」のみでは性感染症の対策として不十分であることは自明のことである。まさに生きる力を育てることのできる「全人間的な性教育」が今一層求められていると言えよう。

#### ま と め

1. 年度別感染者数は、平成7年以降、前2年に比べ倍増していた。
2. 感染者は18歳、19歳が69%と最も多く、高

校生と学生は41.8%であった。

3. 初交年齢は、平均15.4歳であり、性的に早熟な者が多かった。
4. パートナーの年齢は、10代と20代がほぼ同数だった。
5. 感染にいたるまでのパートナー数は1人から20人までとバラツキがあったが、ほとんどが複数であり平均すると6.6人と多かった。
6. 感染者は社会一般の平均と比較すると学業途上の者は少なく、就業していても経済的基盤は低かった。

なお本論文の要旨は、第17回日本思春期学会において発表した。

稿を終るに当たりご校閲いただいた村口喜代先生に感謝いたします。

#### 文 献

- 1) 宮本由美子 他：思春期女子のクラミジア感染症。思春期学 **14**：330-334, 1996
- 2) 伊藤正子：思春期女子の性意識と性行動の現状。産婦人科治療 **72**：423-426, 1996
- 3) 東京都母子保健サービスセンター：高校生の性知識、意識、行動に関する調査。東京都性行動調査委員会、pp 10-80, 1993
- 4) 文部省：教育白書、pp 400-403, 1996